

活動報告

全学FDワークショップ @経済学部・理工学部・短期大学部（船橋校舎）報告

村岡 哲郎*¹⁾, 土屋 将悟¹⁾, 峯岸 邦夫²⁾, 佐伯 勝敏²⁾, 松田 礼²⁾, 今池 健²⁾

¹⁾日本大学経済学部, ²⁾日本大学理工学部

Report on Whole Faculties FD workshop at College of Economic, College of Science and Technology, and Junior College (Funabashi Campus)

Tetsuro MURAOKA¹⁾, Shogo TSUCHIYA¹⁾, Kunio MINEGISHI²⁾, Katsutoshi SAEKI²⁾,
Hiroshi MATSUDA²⁾, Takeshi IMAIKE²⁾

¹⁾College of Economics, Nihon University, ²⁾College of Science and Technology, Nihon University

This is a report on whole faculties FD workshop at Suidobashi Campus which was held on December 9th, 2023. The theme of the workshop was solving the problem of the freshman education in College of Science and Technology, Junior College (Funabashi Campus), and College of Economics. There were 21 participants from three Colleges. They planned the curriculum by discussing the study objectives, learning strategies and evaluations, throughout the discussion at small group work and plenary session.

キーワード：FDワークショップ, 初年次教育, 理工学部, 短期大学部（船橋校舎）, 経済学部

Keywords:

FD workshop, First year experience, College of Science and Technology, Junior College (Funabashi Campus), College of Economics

1. はじめに

本報告は、2023年12月9日に日本大学経済学部本館2階大会議室にて開催された全学FDワークショップ@経済学部・理工学部・短期大学部（船橋校舎）の概要を述べたものである。本ワークショップは理系学部と文系学部の教員が含まれていることから、文理に共通することを前提にした初年次教育のカリキュラムプランニングをその目的として設定した。

ワークショップで使用した教材は、2018年度版の「全学FDワークショップ」のものを基本としているが、ワークショップの目的を達成するために、一部を改変し使用した。本稿では、ワークショップの概要と各グループの議論の上で提示されたプロダクト、総括について報告する。

*E-mail: muraoka.tetsurou@nihon-u.ac.jp

投稿：2023年1月25日 受理：2024年2月29日

2. 全学 FD ワークショップ@経済学部・理工学部・短期大学部（船橋校舎）の実施概要

全学 FD ワークショップ@キャンパスの実施にあたり、経済学部および理工学部の FD 委員会を中心に企画をし、本部で開催されている全学 FD ワークショップでタスクフォースとしてかかわった教員を中心に運営の詳細を検討した。2023 年 10 月 24 日には、経済学部本館 2 階大会議室において本ワークショップの運営に関わる理工学部と経済学部の教職員による対面での打ち合わせおよび会場の確認を実施し、進行分担の確認等を行った。

ワークショップの参加者を教職員 18 名程度とし、それぞれの学部から参加者を募った結果、表 2 に示す 21 名が参加を表明した。これらの参加者を A, B, C の 3 グループに分け、ワークショップを実施した。ワークショップの日程は表 1 に示す。実際の運用は、ほぼ予定通りに実施された。

表 1 全学 FD ワークショップ@経済学部・理工学部・短期大学部（船橋校舎） 日程表

	内容	時間配分	説明者
11:40	受付		
12:00	開会式 ワークショップの進め方	2分 8分	理工学部 峯岸 邦夫
12:10	【初年次教育の問題点】 K J 法・二次元展開法 説明 グループ討議 発表・討議 (7分×3班) 分	8分 30分 21分	経済学部 土屋 将悟
13:09	【学修目標】 説明 グループ討議 発表・討議 (7分×3班) 分	14分 50分 21分	理工学部 今池 健
14:34	【学修方略】 説明 グループ討議 発表・討議 (8分×3班) 分	20分 50分 24分	経済学部 土屋 将悟
16:08	【学修評価】 説明 グループ討議 発表・討議 (9分×3班) 分	20分 50分 27分	理工学部 松田 礼
17:45	閉会式	5分	理工学部 佐伯 勝敏

表2 参加者及びスタッフ名簿

【参加者】

所属	氏名	資格
経済学部	秋山 孝信	教授
経済学部	鈴木 基子	教授
経済学部	廣野 桂子	教授
経済学部	山口 健二	専任講師
経済学部	桑山 啓子	専任講師
理工学部	梅田 耕平	准教授
理工学部	中村 英夫	教授
理工学部	吉岡 慶祐	助教
理工学部	橋本 修	教授
理工学部	相田 康洋	助教
理工学部	田中 賢	教授
理工学部	関根 太郎	教授
理工学部	阿部 新助	准教授
理工学部	岸本 誠也	助教
理工学部	松野 裕	教授
理工学部	鈴木 佑典	教授
理工学部	小松崎 良将	准教授
理工学部	伊藤 勝	助教
理工学部	行方 直人	准教授
短期大学部（船橋校舎）	石鍋 雄一郎	教授
短期大学部（船橋校舎）	宮城 徳誠	准教授

【タスクフォース・モデレータ】

所属	氏名	資格
経済学部	村岡 哲郎	教授・FD 推進委員会委員長
経済学部	土屋 将悟	主事補
理工学部	峯岸 邦夫	教授・FD 委員会委員長
理工学部	佐伯 勝敏	教授・FD 委員会副委員長
理工学部	松田 礼	教授
理工学部	今池 健	准教授

【企画、運営】

所属	氏名	資格
経済学部	田中 縁	主事
理工学部	松原 麻美	参事
理工学部	濱口 博臣	参事補
理工学部	古市 樹里	主事
理工学部	関 大介	主事

3. プロダクト概要

ワークショップにおけるプロダクト概要について、各セクションの説明に沿って以下に示す。

a) 開会式

本ワークショップの趣旨と教育改善へ向けた全学的な取り組みとの関係が説明された。また、文系学部と理系学部との共同での取り組みであることが説明され、文理融合のプロダクトへの意識づけが成された。

b) ワークショップの進め方

ワークショップについて、その定義、原理、およびその期待効果について説明がなされ、続いて、グループワークの進め方（役割分担）と全体討議の議論などのワークショップの進め方が説明された。

c) 初年次教育の問題点抽出のためのKJ法・二次元展開法

このセッションでの出発点となる初年次教育の問題点抽出については、事前課題として参加者に予め問題点抽出を行って参加してもらう形式とした。そのため、日本大学教育憲章、初年次教育の重要性、KJ法については資料を事前提供した。二次元展開法の実施方法は当日に説明された。

KJ法においては、Google Jamboardを用い、関連する意見が出やすいようにした。初年次教育の問題点の指摘においては、関連する教育憲章能力、自主創造の3つの構成要素、8つの能力を意識することが指示された。3グループに共通する問題として「学生の意識の問題」が取り上げられていた。最終的に、各グループからは以下の「初年次教育の問題点」を踏まえたニーズ（授業の一般目標）が抽出された。

A：生成AIが急速な発展を遂げる中、価値を生み出す人材となるために必要なことを修得する。

B：社会の多様性を考慮した情報共有能力を修得する。

C：日本大学で学ぶモチベーションを醸成し、大学共通基盤（キャンパス、カリキュラム）と学部独自プログラムを理解した上で、グループワークに必要なコミュニケーション力を涵養する。

d) 学修目標

はじめに、学修のプロセスに基づいて、初年次教育の問題点をカリキュラムへ展開する流れが提示された。カリキュラムの三要素（目標、方略、評価）のサイクルを認識することの重要性が協調された上で、的確な学修目標を設定することの必要性が説明された。授業の計画を策定するにあたっては、ミクロレベル～ミドルレベル～マクロレベルの関係性を理解した上で、ミドルレベル、マクロレベルで検討された能力ごとの学びの深さとの関係も示したカリキュラムプランニングが求められることが説明された。各グループでの検討の結果、学修目標の中でもGoalを達成するために、具体的・個別的に修得すべき項目である個別行動目標（SBOs）が表3のとおり提示された。

e) 学修方略

カリキュラムの三要素のサイクルに従い、学修のプロセスにおける学修方略の位置づけが示された。学修方略とは何かという説明の後、学修方法の種類、学修のピラミッド、学修方略選択のポイントが示された。また、授業運営において考慮すべき学修のための資源についても説明があった。各グループは表3に示された個別行動目標に対して、学修のタイプ、種類、時期、人的資源、物的資源、コマ数、予算を決定した。各グループでの検討結果はそれぞれの特徴が出ており、100%能動的学修というグループもあれば、50%超が

表3 各班の個別行動目標 (SBOs)

A 班

個別行動目標 (SBOs)	領域
生成 AI のアクセス方法など基本的な技術を習得できる	技能 (模倣)
生成 AI による, 翻訳, 要約, 画像生成, 自動化技術を習得できる	技能 (自動化)
生成 AI の間違いを, 正しい情報から指摘することができる	知識 (解釈)
生成 AI の学習データに関する著作権の問題を説明することができる	知識 (解釈)
AI・デジタル社会で孤立しない参加型の協調行動ができる	態度 (内面化)
実社会における AI の活用領域と留意点を説明できる	知識 (解釈)
生成 AI を活用したアジャイルなプロジェクトマネジメントができる	態度 (内面化)
生成 AI の出力を活用して, 論理的な文章を記述することができる	技能 (模倣)
生成 AI による, 翻訳, 要約, 画像生成, 自動化技術を活用できる	知識 (問題解決)
情報・AI 倫理を説明できる	知識 (想起)
一次情報, 二次情報を類別できる	知識 (想起)
情報の確からしきや正確性を適切に判断できる	技能 (模倣)

B 班

個別行動目標 (SBOs)	領域
パソコンを使って図書館やデータベースにアクセスし, 関連文献を検索できる。	技能 (コントロール)
世界の現状に対する関心を持ち, 問題解決に必要な情報を集めることができる。	技能 (コントロール)
社会の一般常識を説明できる	知識 (想起)
パソコンなどの情報共有のためのツールを使うことができる。	技能 (コントロール)
複数の情報を合わせてまとめることができる	技能 (コントロール)
最先端の情報収集方法が説明できる	技能 (コントロール)
グループで議論して, 要点をまとめることができる。	態度 (反応)
発表内容を, パワポやワードに整理して作成することができる。	技能 (コントロール)
適切な情報源を選択し, 活用できる。	知識 (解釈)
多様な特性を持つ他者を尊重し, 協働できる	態度 (受け入れ)

C 班

個別行動目標 (SBOs)	領域
日本大学で学ぶモチベーションを高めることができる	知識 (想起)
日本大学全体で学ぶメリットを説明できる。	知識 (想起)
各学部における教育の特徴を知ることができる。	知識 (想起)
専門分野における到達点または課題について調べる	知識 (想起)
客観的な視点から問題解決に向けて調査・検討することができる。	技能 (模倣)
大学における学びの方向性を明確にすることができる。	技能 (模倣)
グループワークを通じて, 多様性の大切さが理解できる。	態度 (受け入れ)
グループワークを通じて, コミュニケーション能力を身につける	態度 (受け入れ)
グループワークでディスカッションすることで問題を発見し, 問題解決法の 1 つを到達目標として取り纏める事ができる。	態度 (受け入れ)
グループワークの発表でプレゼンテーション能力を身につける	技能 (模倣)
個人の能力や特性を生かしたグループ学習を通して課題解決を行うことができる。	技能 (模倣)

受動的学修というグループもあった。

f) 学修評価

最後のセッションにおいてもまずは学修のプロセスにおける位置づけが確認された。そして、学修評価がどのようなものであるかの説明があり、どのような原則の下で評価手順が実施されるべきであるか説明された。参加者は学修目標と学修評価の関係を理解した後、各グループで学修目標と学修方略の再検討をし、評価計画の妥当性、客観性、効率性などを考慮して評価の方法を検討した。さらにチェックリストと評価尺度を作成した。3グループとも形成的評価がメインとなっており、対象領域は知識が最も多く、態度・技能が同程度であった。

g) 閉会式

全体総括および協力、企画、運営に対して謝辞が述べられた。

また、今回出された意見や結果を、今後の教育活動や講義に活用してほしい旨が述べられた。

4. 総括

事後アンケートの結果（表4）、ワークショップにおいて一定の効果があったことが示された。ただし、ワークショップの内容が初年次教育の問題点から学修目標、学修方略、学修評価へと進むにつれて「理解できたが応用力は不十分」の割合が増えていたことから、自身のカリキュラムプランニングにおいては各自の更なるFD活動が必要であると考えられた。

本ワークショップは理系学部と文系学部の共催という形を取った。この点に関して「学部・学科の異なる教員とのグループだったので、普段接しない考え方やアプローチがあり、参考になったこと」「他学部（文系学部）、他学科との交流が持てたこと」「文理融合でワークショップを行い、理工学部の先生方の意見が参考になったこと」というように評価する声が聞かれた。@キャンパス＝単一学部とせず、複数学部共催という形で開催したことのメリットが多少なりともあったのだと思われる。

限られた時間のワークショップでは限定された成果に留まるかもしれないが、過半数の参加者はワークショップが長いと感じていた。予めスライド資料などを配付することなどをはじめとして様々な工夫をこらし、ワークショップがコンパクトでより効果的になるよう、ワークショップ自体も進化する必要があるだろう。

5. まとめ

本ワークショップにより、参加者は日本大学教育憲章や自主創造の3つの構成要素と8つの能力を強く意識してカリキュラムプランニングを行う手法を理解し、半数程度は応用力も身に付いたと感じていた。

参加者の多くが本ワークショップの価値を認める一方、時間的拘束に不満を感じる参加者もあり、資料の事前配布など、ワークショップ自体も進化する必要があると思われる。

表4 事後アンケートの結果

今回のワークショップにおける次の項目のうち、理解度はいかがでしたか。入力してください。	理解できた	理解できたが応用力は不十分	理解できなかった		
初年次教育の問題点	94%	6%	0%		
[学修目標]	88%	1%	0%		
[学修方略]	75%	25%	0%		
[学修評価]	50%	50%	0%		
ワークショップ全体にかかった時間について、どのように感じられましたか。	短かった 0%	やや短かった 0%	適切であった 38%	やや長かった 44%	長かった 19%
ワークショップの難易度について、どのように感じられましたか。	易しかった 0%	やや易しかった 6%	適切であった 69%	やや難しかった 25%	難しかった 0%
本日の内容について、今後ご自身の教育活動に取り入れてみようと思いますか。	とてもそう思う 19%	そう思う 69%	どちらとも言えない 13%	そう思わない 0%	全くそう思わない 0%
本日のようなワークショップを今後も各学部で開催すべきだと思いますか。	とてもそう思う 19%	そう思う 44%	どちらとも言えない 38%	そう思わない 0%	全くそう思わない 0%
今回のワークショップで、よかったと思われることがあればお書きください。	<p>1年生の問題点を共有できたこと。その解決策をみんなで提案出来て話し合えたこと。</p> <p>理工学部の初年次教育について、規模（学生数）と担当教員数について、知ることができました。</p> <p>グループの先生方とAI教育について議論できたこと</p> <p>他学部の先生方とお話できた点は、とても良かったと思います。</p> <p>学部・学科の異なる教員とのグループだったので、普段接しない考え方やアプローチがあり、参考になったこと</p> <p>各学部の若手の先生と貴重な意見交換ができたところ。教育に関して曖昧だった点を再確認することができたところ。AIに関して教員がどのように捉えているか、今後、どのような形で向き合っていくべきかなどの考えを共有できたところ。</p> <p>ワークショップをしやすい環境を準備していただいたこと。</p> <p>今回のワークショップでは、理工学部の先生方とグループを組めて、AIに関する学修ユニット（科</p>				

	<p>目)について議論できてよかったこと。 他学部(文系学部),他学科との交流が持てたこと。 科目設計の一連の流れを一度に学べたのがよかったです。 異なる学科・学部教員間で意見交換ができたこと 文理融合でワークショップを行い,理工学部の先生方の意見が参考になったことです。 日本大学教育憲章を基軸とする科目立案について深く考えることが出来たこと</p>
<p>今回のワークショップで,よくなかったと思われることがあればお書きください。</p>	<p>テーマをもう少し具体的に,絞られたものであったらもう少し分かりやすかったと思う。ワークショップをどのようなことについてどのように進めていくのか予め知りたかった。 作業の時間50分は長すぎて,後半が雑談になってしまうので,30~40分で充分だと思います。 長時間で疲れました。説明スライドは予め配布してほしいと思います(説明が早すぎたところがありました)。 事前に,全体の流れなどについてももう少し詳しい説明があるとよろしいかと思われました。 特にありません 各学部の中で共通した課題をまずしっかりと吸い上げておいて,同じ問題点・科目としてどのように取り組んでいくのかという比較をしても良いのかなと思いました。他の班ならではの工夫や,良い取り組み・悪い取り組みなどに関して考えても良いのかなとも思いました。 実施時期(年末土曜日の実施),時間配分(セッション3で50分確保していたこと) プレゼン方法(資料の文字が小さくて読めないなど)。休憩時間が少ない。</p>

